

無形民俗文化財

13 三作神楽 (国)

和田三作地区 (林・原赤・中村) に伝えられる神楽です。7年目 (卯年・酉年) ごとに奉納され、23の舞があります。神楽りの古風な形をよくとどめており、この地方の神楽の系譜を考えるうえで、非常に重要なものです。

P8 C-4



三方荒神の舞



卓の舞



梁鬼神の舞

52 山崎八幡宮の本山神事 (県)

元禄15年 (1702) に五穀豊穣祈願のために、本山などの山車を奉納したことに始まる神事です。本山は境内の坂を引き上げられた後に突き落とされ、その傾きによって豊凶を占います。

P20 D-4



79 談鼓踊 (県)

豊田秀古が文禄の役の戦勝の礼として奉納したとも、陶師が内義隆を滅ぼした時の様子を踊りにしたとも言われる踊りです。歌や音曲を伴わず、太鼓と鉦を伴奏として、団扇と棒を用いることに特色があります。7年ごとの秋に熊毛神社に奉納されます。

P32 B-3



75 須々万八朔祭り (市)

夏の暑気と災厄を払い除ける八朔祭りと年の育成を願って穂ばらみ期の風害を除けようとする風鏡祭に、天竺宮の祭りが組み合わさったものです。

須々万各地区から揉山が奉納されるとともに、大名行列を先導とした大行司・小行司及び綱代車が御旅所までを往復します。

P12 B-4



10 式内踊 (県)

五穀豊穣、厄除退散を願い二保神社に奉納する踊りです。初神体に札を欠いたことから飢饉となったために、伊勢神宮へ参拝する道中で習い覚えたと言われています。

P6 B-4



20 長穂念仏踊 (県)

陶氏供養のため、後に雨乞いの踊りとして伝えられる踊りです。杉氏が龍文寺にたてこもった陶崎眞の子・長房を攻撃するため、周方神社祭礼の踊りに紛れ乱入して討ち取ったことに由来するとされています。

P11 E-3



77 花笠踊 (県)

大内義隆の豊を供養するためと言われる踊りです。花笠をかぶった踊り子などが、魚切の「山の神」社で踊った後、行列を組み二所神社に向かいます。風流踊りの一つですが、小歌を歌い踊るところに特徴があります。

P30 C-3



83 周南市安田の糸あやつり人形芝居 (県)

浄瑠璃に合わせて糸で人形を操って行う素朴な芝居です。この芝居は、三丘領主の六戸氏が定めた安田市の餅し敷として、阿波の松尾某という商人が伝えたことに始まるとされています。

P33 E-4



80 新畑神舞 (市)

熊毛神社と人丸神社の祭礼に奉納される神楽舞です。白衣に馬鹿袴をはき、五色のたすきをかけて鉢巻をしめて舞い、はやしは笛や太鼓、鉦を用います。

P32 B-4



その他の民俗芸能

小河内神楽 (大湖)



一説によると元治元年 (1864) に筆前という者が、石川吉備村の清人太夫から「鹿の飛び出し」という神楽を習ってきたのが、この神楽の始まりとされています。「八割」、「三鬼人」など24の舞があり、大湖神社で奉納されています。

P3

堤区宿入奴 (鹿野)



明治20年頃、堤・石ヶ谷地区の有志が天満宮夏祭りに奉納するため、右田毛利家 (防府市) から道具一式を購入して宿入奴を習い、今に引き継がれているものです。「本宿入奴」(50人) と「簡易宿入奴」(20人) があり、現在は主に後者が行われています。

P4

網代 (鹿野)



二所山田神社境内の菅原神社天神祭にて奉納されてきたものです。御旅所までの御神幸では、裸坊が綱代車を勢いよくひき、また回転させながら街道に沿って走り歩きます。天神祭は、毎年7月30日に行われています。

P4

鹿野さんさ踊り (鹿野)



祖先の霊を迎え入れるために行われるもので、かつては初盆を迎える精霊への供養として、新仏のあった家の前で踊られていました。くどき唄は、「鈴水主水」や「山崎三太」です。現在では、8月頃に各地区の広場で踊られています。

P4

手踊り (大道理)



1740年頃、村は風水害に見舞われ、困窮していました。そのため村の若い衆が大内時代より伝わる踊りを山口で覚え、河内神社で踊ったことに始まると伝えられています。

P10

須々万地区盆踊り (須々万)



起源・詳細は不明ですが、古くから盆に須々万地区で踊りが行われてきたものです。現在は、毎年8月頃に沼城小学校グラウンドで踊られています。

P12

もろつき踊り (中須)



戦国時代、美濃國の墨川三郎がこの地に逃れた際、兵法武士十八般の内、棒行の流れを汲むものを伝えたのが始まりとされます。

P13

久保神楽 (中須)



明治の初め、五穀豊穣と民衆安全祈願のために始められたといわれています。「大蛇退治」などの演目があり、10月下旬の中須八幡宮秋祭大祭ほかで披露されています。

P13

揉山 (中須)



江戸時代中期より続いていると伝えられています。単やかに踊った揉山に化粧をした男児2人が乗って太鼓を打ち鳴らし、白装束の若者数人が担ぎます。7月下旬の中須八幡宮御田原祭において行われています。

P13

だいがら踊り (湯野)



明治の初めに朝仏供養や雨乞祈願のために始まった踊りと伝えられています。足で踏んで米をつく「だいがら」に太鼓を打つ、大傘、大提灯を取り付けたものを中心に輪になって踊ります。毎年8月頃に湯野地区各地で踊られています。

P14

福川盆踊り (福川)



江戸時代末、農耕地域での窮乏し、雨乞いや、豊作祈願、程刈り等の節目や、新穂豊供養のために始まった踊りと伝えられます。音頭を口説き1人と太鼓打ち4人が一伴となり、その周囲を踊り手が踊ります。毎年8月頃に福川で行われています。

P17

さんさ踊り (徳山)



豊作や民衆の無事安泰、亡くなった人の供養を願って踊り継がれてきたものです。近年まで、毎年道石八幡宮に、各地から1m以上もある太鼓を持ち寄り、その勢いを比べあっていました。各地区で7月～8月頃に踊られています。

P24

平家踊り (大津島)



12世紀末頃、平家の落人が馬島に移り住み、平家の再興と慰霊を願い、一族郎党が集まって旧暦7月14日から三晩満月のもとで踊り明かしたことに始まると伝えられています。毎年8月頃に踊られています。

P36

長持明 (大津島)



江戸時代末から行われてきたと伝えられます。花嫁の長持を飾り付け、その豪華さを誇りながら唄ったものです。現在は竹竿に吊るした米俵などを飾り付け、掛け声を入れながら村中を練り歩きます。10月の木原神社秋祭りほかで行われています。

P36

貞船祭 (給島)



海上安全を祈願して慶安年間 (1648～1651年頃) に始まったと伝えられています。海の男たちの豪快な祭として代々伝えられ、貞船神社から御旅所までの海上約500mを神輿が渡ります。毎年7月下旬頃に行われています。

P37

神踊り (大島)



ある年、牛の欄で疫病が流行ったので、富士権現に願をかけ、疫病の鎮静を祈り続けたところ、びたりと止まりました。そこで疫病88本で作った「たなばた」を中心に輪になって感謝の踊りを踊ったのが始まりです。毎年8月頃に行われています。

P37